

# エズラ・パウンドとチャールズ・オルソン

## —叙事詩はいかにして歴史を含むか—

平 野 順 雄\*

Ezra Pound and Charles Olson:  
How does the Epic contain History?

Yorio HIRANO

キーワード エズラ・パウンド Ezra Pound  
チャールズ・オルソン Charles Olson  
『詩篇』 *The Cantos*  
『マクシマス詩篇』 *The Maximus Poems*  
叙事詩 Epic  
歴史 History

|            | パウンドの『詩篇』                                                                                                                                                                                             | オルソンの『マクシマス詩篇』                                                                                                                                                                 |
|------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 詩学         | “How to Read” 中で「ロゴペイア」は「知の舞踏」とされる→「投射詩論」                                                                                                                                                             | 「投射詩論」←『ピサ詩篇』                                                                                                                                                                  |
| 個人史        | オルソンは、聖エリザベス病院でパウンドに会う。                                                                                                                                                                               | パウンドは『マクシマス詩篇』中に登場する。<br>Letter 6 (31-32), Letter 7 (35), The Twist (86)                                                                                                       |
| 叙事詩に含まれる歴史 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Canto XIII (60)</li> <li>・ Canto LIII (265) 新日日新</li> <li>・ Canto LXXIV (445)</li> <li>・ Canto LXXXIII (551-52) 勿助長</li> <li>・ Canto XCIX (729) 兆</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Letter 16 (76)</li> <li>・ Letter 23 (103-05)</li> <li>・ <u>December 18th</u> (599)</li> <li>・ Migration in Fact (479, 565)</li> </ul> |
| メタポエトリ     | ・ Notes for CXVII et seq. (822)                                                                                                                                                                       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Letter 23 (104-05)</li> <li>・ Letter 27 (184-85)</li> </ul>                                                                           |
| 英雄たち       | シジスムンド・マラテスト、ジョン・アダムズ、孔子、ムッソリーニ、古代中国の王                                                                                                                                                                | グロスターの漁師たち                                                                                                                                                                     |

### 本論目次

- I. 聖エリザベス病院のパウンドとオルソン
- II. 「投射詩論」
- III. 『マクシマス詩篇』 中のパウンド
- IV. 『マクシマス詩篇』 中の歴史
- V. 『詩篇』 中の歴史
- VI. 暫定的結び

\*人間関係学科 教授

## I. 聖エリザベス病院のパウンドとオルソン

キャサリン・シーリー (Catherine Seelye) は、次のようにコメントしている「パウンドを見舞いに行っていた時期、オルソンは活力が最も衰えていた」。オルソンは、仕事においても人生においても、自分自身を「失敗者」だとみなしていた。「メルヴィルに関する本を書くために、大学を捨て、次に政治の世界を捨てた」(Seelye xxiii)。本は書き上げたものの、人生の方針が立っていなかった。オルソンの揺れる心をシーリーは次のように分析する。

オルソンは、どんな種類のものでもパウンドのファシズムにはぞっとしたが、ぞっとする気持ちから何度も何度も引き戻されては、パウンドの心を和ませる風格と魅力の虜になるのであった。(Seelye xx-xxi)

オルソンの訪問は、パウンドにとっては楽しいものであったが、来てくれたことに対するパウンドの愛情のこもった挨拶さえ、オルソンには厭わしかった。オルソンの手記「詩篇 5, 1946 年 2 月 7 日, 3:15-3:30」は以下のようである。

「来てくれてありがとう。君はわたしの生命を一度ならず救ってくれた。元気な時に、また来てくれ給え」(!) とても不快だった。私に言えたのは「手を差し伸べることはできます」だった。(Seelye 71)

こうしたオルソンの様子は、巨大な猫、エズラ・パウンドに魅入られた二十日鼠のようである。しかし、オルソンはパウンドの欠点を見出す。「おじいさん、さよなら」の章でオルソンは言う。

パウンドは、自分自身の体験に沈潜したようには見えない。彼の転向は、あまりにも速やかになされると言ってもよい。消えずに残る印象は、パウンドの生きた唯一の人生は、実は、文学的人生だったというものである。そういう人生が我々の父親には必要だったと認めるにしても、とりわけ、大規模な開墾の仕事をした者にとっては必要だったとしても、私はそれを間違いだと思う。言語の煌めきは、それ自体は楽しいものだが、根が枯れてしまうからだ。(Seelye 99)

師の詩人としての限界を突き止めることによって、オルソンはパウンドの呪縛から自由になったのだ。次に我々は有名な論文「投射詩論」(“Projective Verse” 1950) を検討することにしよう。

## II. 「投射詩論」

「投射詩論」冒頭で、オルソンは、二つのことをしたいと言う。それが何かを見ておこう。

わたしは二つのことがしたい。まず、投射詩あるいは開かれた詩が何であるかを示したい。それが、創作行為において何を含み、非＝投射詩とどのように違った作られ方をするのかを示したいのである。そして第二に、現実に対するどんな姿勢が、投射詩を生み出すのかについて、いくつかの考えを述べてみたい。(“Projective Verse,” *Human Universe* 51)



た詩作の方法なのである。次の章に移ろう。

### Ⅲ. 『マクシマス詩篇』 中のパウンド

パウンドが、『マクシマス詩篇』中にどのように登場するののかを見ておこう。「手紙 6」をご覧ください。

（「ピック・ニックだと」とパウンドは怒鳴った  
それは妻のコンが、フライドチキンを持ってきたから  
午後のひととき、リズ病院の外へ出て、  
アナコステア川を眺めながら、  
テニスコートのそばで食べるのはどう、と提案した時のことだった

おれもコンの思いつきに反対だったが  
理由はちがう。テニスコート脇だと、海軍軍用機の  
轟音がうるさい、それに、この凄い男の背景には  
入院患者たちのおしゃべりの方がふさわしい  
黒外套に身を包み、大きな帽子をかぶった全人が  
おぼつかないに歩く、パウンドの  
ゆらりとした動作

“Letter 6” (*The Maximus Poems* 31-32)

これは、1946年10月に、オルソンが妻コンスタンス (Constance) と一緒に、ワシントン D.C. の聖エリザベス病院に収監されているパウンドを見舞ったときの出来事である。コンスタンスが、病院の外で「フライドチキン」を食べまじょうと提案したとき、「ピクニック」を軽蔑してパウンドが怒鳴ったのである。パウンドを楽しませようとするコニーの思いは、オルソンの思いと、くっきりとした対称をなしている。

二つ目のパセッジをご覧ください。オルソンは、病院内の「患者たちのおしゃべり」の方が「凄い男」エズラ・パウンドの背景にふさわしいと考えている。オルソンの意見は、DTCでパウンドが囚人たちに対して取った態度と一致している。『ピサ詩篇』でパウンドは言う、「看守たちの意見は、囚人たちの意見より低俗だ」(*The Cantos* 456) と。

二つ目のパセッジの「全人」(“whole man”) に注意して頂きたい。この語句は、『ピサ詩篇』の「ウーティス」(OY TIS: Noman) との関連で解釈しなければならない。「全人」という語句を使うことによって、パウンドがピサの収容所で失った偉大さを、オルソンは回復させようとしているのだ。しかし、コニーには、オルソンの意図が分からない。なぜオルソンがパウンドを「黒外套に身を包み、大きな帽子をかぶった」とするのか、理解できないのである。「手紙 7」をご覧ください。

「どうして、あの人が黒い帽子をかぶっていることにしたの、  
それも、つば付きのを？」と妻は尋ねた。  
「テニスシューズを履いて、

ロープを  
ベルト代わりにしているのに？」

“Letter 7” (*The Maximus Poems* 35)

我々には答が分かる。オルソンは、パウンドの威厳を取り戻そうとしているのだ。たとえパウンドが「テニスシューズ」を履き、ベルト代わりに「ロープ」を使っているとしても、パウンドは大詩人にふさわしいコスチュームとして「つば付きの黒い帽子」をかぶっていなければならないのだ。こうして『マクシマス詩篇』中ではパウンドは、類まれなる大詩人として、絶大なる敬意をもって描かれるのである。しかし、ある時点になると、パウンドとオルソンとの絶対的師弟関係に変化が生じる。「トウイスト」をご覧ください。

あるいは、高らかに歌うことと  
物そのものに  
歌をひそませることを  
区別する、彼とおれ。  
彼に、おれは花を  
(百日草)を植えてやる  
彼の家  
中の、湿った土に

“Twist” (*The Maximus Poems* 86)

引用前半では、オルソン（「おれ」）がパウンド（「彼」）と同等の叙事詩人になっている。引用後半の両者の関係は、謎めいている。そこで「百日草」と訳した“*xenia*”を辞書で調べてみると、以下のように定義されている。

*xenia* [Gk. *xenia*. the rights of a guest, hospitality, from *zenos*, guest friend] in botany, the immediate influence of pollen from one strain of a plant upon the seed of another strain, resulting in hybrid characteristics in the form, color, etc. of the resulting growth. (*Webster English Dictionary* 2<sup>nd</sup> Edition, 1957)

すなわち、「キセニア」とは、植物学用語で、ある植物の花粉の影響が、他の植物の種子に直ちに現われる現象である。混成の特徴は、その結果生ずる植物の形態や色彩その他に現われる。

引用した詩の後半は、オルソンが花粉となって、種子であるパウンドに影響を及ぼすと解釈できる。植物学の隠喩によって、はじめてオルソンはパウンドへの対抗意識を示したのである。

『マクシマス詩篇』におけるオルソンのパウンドに対する姿勢を振り返ると、三つの段階が認められる。(1) 師に対する弟子の尊敬の念（「手紙6」「手紙7」）から、(2) パウンドと同志であるという感覚（「トウイスト」前半）を経て、(3) パウンドに対する競争意識をあらわにする段階（「トウイスト」後半）への三段階である。

オルソンとパウンドは叙事詩を書くために膨大な書物と文書を読んだ。しかしながら、二人の創作したテキストは根本的に異なるものだった。それは二人の詩人の持っていた方向性の違いゆえだと考えられる。本論考の冒頭に挙げた表のメタポエトリイの箇所を参照願いたい。パウンド

作『詩篇』とオルソン作『マクシマス詩篇』中の詩論として読める箇所を以下に挙げてみる。

・パウンド「詩篇 107 番へのノートとその続き」

愛する人よ、愛する人よ  
私は何を愛し  
あなたはどこにいるのか？  
この世の中と闘ううちに  
私は中心がどこか分からなくなった  
夢はぶつかり合い  
砕け散った—  
私は、この世の天国を  
作ろうとしたのだ

私は天国を書こうとした  
動くでない  
風に語らせよ  
それが天国だ

“Notes for CXVII et seq.” (*The Cantos* 822)

・オルソン「手紙 23」

私は、ヘロドトスのような歴史家になりたい、語られていることの  
証拠を自分で  
探すのだ

“Letter 23” (*The Maximus Poems* 104-05)

パウンドの『詩篇』は「地上天国」建設のために書かれているのに対し、オルソンの『マクシマス詩篇』は、ヘロドトスのような歴史家を範とする者によって書かれているのだ。

では、二人の叙事詩人が、どのように歴史を作品の中に取り入れていったのかを検討しよう。まず、オルソンの『マクシマス詩篇』から始める。

#### Ⅳ. 『マクシマス詩篇』の中の歴史

『マクシマス詩篇』の主要な主題の1つは、資本主義との闘いである。今一度、本論考冒頭の表をご覧ください。「手紙 16」, 「手紙 23」および「12 月 18 日」には、資本主義の破壊的側面を示す歴史的 사실이記されている。

・「手紙 16」

バウディッチは（後に）ハーヴァード大学の経営陣に加わり、

敵を作った。カークランド追い出しに手を貸したせいだ。  
だが、バウディッチこそ、大学を財政難から救った功労者だ、  
という議論もある（バウディッチは、更に保険会社をいくつか作った。  
数字に強かったし、  
セーレムから出航する船の船荷監督を長年勤め、  
マサチューセッツの貿易商人が儲かるように取り計らった経験があった

つまり、バウディッチが体現しているのは、ニューイングランド・マネーの動き  
初期の産業と売買から離れ、  
様々な腐敗と結託して利潤を追求するニューイングランド・マネー。  
アメリカが大国にのし上がったのは、アジャスタさながらの腐敗のおかげ。

もちろん、この間に、腐敗は  
土地と労働を呑み込む。そして、今や  
世界をも。

“Letter 16” (*The Maximus Poems* 76)

ナサニエル・バウディッチ (Nathaniel Bowditch) は、1826 年にハーヴァード・コーポレイションに選ばれた。このコーポレーションは、学長と 6 人の同志 (fellow) からなる一団である。バウディッチは学長ジョン・ソーントン・カークランド (John Thornton Kirkland) 追い出しに手を貸し、大学の経営改革に成功した。バウディッチはマサチューセッツ州の信頼のける金融業者だった。孫のヘンリー・バウディッチは言う、バウディッチの「船荷監督としての経験から、それぞれの信託財産を厳密に分けておくというアイデアが生まれた (中略) そうすれば、ある信託財産の利益や損失が、他の信託財産に影響することはないからだ」(ヘンリー・バウディッチ著「ナサニエル・バウディッチ」p. 108; Butterick 111)

『マクシマス詩篇』の語り手、マクシマスは、正反対の立場をとる。ニューイングランド・マネーを濫用したとして、マクシマスはバウディッチを糾弾するのである。バウディッチは正直な「生産と売買」を応援せず、資本家の利潤追求に奉仕する有能な道具として働いたのである、と。資本主義は情け容赦なく「土地と労働力」を搾取し、ついには「世界を」呑み込んでしまう。この資本主義に対する闘いは、アメリカ建国期に、すでに始まっていた。

・「手紙 23」

だが、驚くべき事実がまず、ここにある。チャリティ号で (中略) 英国を出た  
プリマス住民の方が、前述のドーチェスターの漁師より先にアン岬に到着していた  
とあらゆる文書が語っているのだ。ピルグリム達は、ウェイマスを出て、  
五週間後に漁をする足場<sup>ステージ</sup>を作っていた。ドーチェスターの漁師が着いたのは、その後だった。  
次の入植期に争点となるのは、この漁業足場<sup>フィッシング・ステージ</sup>である。  
プリマス住民が戻ってみると、漁業の足場を、西部地方<sup>ウエスト・カントリー</sup>の漁師らが  
我が物顔で使っていた。そこで、急遽マイルズ・スタンディッシュを呼び、漁業足場の  
奪回を図ったのである。

資料によれば——まさに、うちの玄関先で起こった事件だ。「フィッシュマンズ・フィールド」に関して、最近の歴史家はどんな研究をしているのか、マークに聞いてみた時……おれは、詩に関心があるのだと言わなかった、そんなことを言おうものなら縮み上がってしまうだろうから。(中略)

この原野で起こったグロスター住民とプリマス住民との争いは、  
一つの植民地ともう一つの植民地との争いに  
とどまらない。それは、全面戦争なのだ。敵は、まず(一)商業主義(中略)  
それに(二)生まれたばかりの

資本主義だ。ただし、個々の冒険商人と労働者が、分け前にあずかる  
段階に留まるなら、話は別——敵は、墮落する国家主義全体なのだ。所有権が  
共同体に割り込む、商工会議所や、神権政治、  
あるいは、市政担当官の形をとって

“Letter 23” (*The Maximus Poems* 103-05)

#### i. 第一パセッジ

「手紙 23」の最初のパセッジを読むには、簡便な年表が役に立つので、以下に挙げる。  
年表

- 1620 ピルグリム・ファーザーズがメイフラワー号でプリマスに到着。
- 1623 プリマス住民は、アン岬に対する特許状を入手。
- 1624 プリマス住民は、漁業足場、すなわち漁業栈橋をアン岬のグロスターに作り、  
英国から新大陸へ渡ってきて漁業に従事する者を募集する。
  - ・しかし、漁業を営むためにプリマスへ来る者はなかった。
  - ・他のピューリタンたちがチャリティ号に乗ってプリマスに到着。
  - ・ドーチェスターの漁師たちがグロスターへの入植を開始する。  
グロスターの漁師たちは、プリマス住民に断りなく、遺棄されていた  
「漁業足場」を使った。
- 1625 グロスターの漁師とプリマスのピューリタンは、「漁業足場」をめぐる争った。

年表を読み下すと以下のようになる。

ピルグリム・ファーザーズがメイフラワー号に乗ってプリマスに到着したのは、1620年のことである。1623年に、ピルグリムたちは、アン岬に対する特許状を入手したが、誰も漁業に従事しなかった。特許状を活かすために、プリマス住民は漁業足場、すなわち漁業栈橋を1624年に作り、英国から新世界へ渡ってきてアン岬で漁業に従事する者を募った。しかし、来る者はなかった。

別のピューリタンがチャリティ号に乗ってプリマスに着いた1624年には、漁業足場、すなわち漁業栈橋は、アン岬のグロスターで完成していた。しかしながら、漁業足場は、実質的には、プリマス住民に見捨てられていた。

以上が、<sup>ステージ・ファイト</sup>「漁業足場争奪戦」すなわち「漁業栈橋争奪戦」の背景である。

ドーチェスター・カンパニーの漁師たちが1624年にグロスターに着いた時、見捨てられた「漁業足場」が手近にあることに気づいた。漁師たちは、プリマス住民の許可を得ずに、漁業のため「漁業足場」を使った。プリマス住民がこれを知ると、「漁業足場争奪戦」が起こる。グロスターの漁師たちとプリマスのピューリタンは、1625年に「漁業足場」をめぐる戦ったのである。

第一パセッジは、プリマスのピューリタンとグロスターの漁師の間で、どのようにして「漁業足場争奪戦」が起こったかを説明している。最終的に、プリマス住民は、グロスターの漁師たちを叩き潰すため、軍人キャプテン・マイルズ・スタンディシュを呼び寄せた。

## ii. 第二パセッジ

第二パセッジでは、「漁業足場争奪戦」が、「フィッシャマンズ・フィールド」で起こったことを知って、驚くオルソンが描かれている。「フィッシャマンズ・フィールド」は幼少期のオルソンが両親とともに夏を過ごした場所だからだ。つまり、アメリカ建国史がオルソン個人の歴史に入り込んでいることを知った驚きである。

## iii. 第三パセッジ

第三パセッジは、「漁業足場争奪戦」の歴史的分析である。オルソンはこう言う。「それは、一つの植民地ともう一つの植民地との争いにとどまらない」。「それは、(一) 商業主義と(中略)(二) 生まれたばかりの資本主義に対する全面戦争なのだ」と。グロスターの漁師たちは、日々の糧を得ることができれば満足していること、それに対して、ピューリタニズムは資本主義と結びつきやすいことを我々は知っている。

しかし、なぜ「漁業足場争奪戦」が、プリマスのピューリタンと商業主義および生まれたばかりの資本主義との結びつきを示すことになるのだろうか。「所有権」が鍵である。自分たちが遺棄した「漁業足場」の「所有権」がグロスターの漁師たちによって侵されそうになると、プリマスのピューリタンは、グロスターの漁師たちと闘うことを決意し、プロの戦士キャプテン・マイルズ・スタンディシュを呼び寄せたのだ。「所有権」は、利潤追求の基礎にある。だからこそオルソンは、グロスターの漁師たちとプリマスのピューリタンとの闘いを、「商業主義と生まれたばかりの資本主義に対する」闘いに見なすのだ。所有権を悪の温床とみなす考えは、「手紙 3」冒頭 (*The Maximus Poems* 13), 「マクシマスの歌」 (*The Maximus Poems* 18) にもみられる。

・「12月18日」

グロスターも

気が狂ってしまい  
今やアメリカ合衆国と  
区別がつかない。

“December 18<sup>th</sup>” (*The Maximus Poems* 599)

オルソンは絶望して叫ぶ。グロスターまでもが墮落して、資本主義国家アメリカと完全に同

化してしまったからだ。地理的に言うと、グロスターはかつて、アニスクウォム川によってアメリカ本土と隔てられており、島のような性格を持っていた。1950年に川に橋が架けられ、高速道路ルート128が開通すると、歴史家トマス・バブソンは言う。この高速道路によって「漁業以外の新しい産業が入ってきやすくなるだろう」(Thomas Babson, “Evolution of Cape Ann Roads” 328; Butterick 233) と。

オルソンにとって、高速道路ルート128は、グロスターに利潤追求の精神を運び込むものに他ならない。そして利潤追求の精神は、グロスターの人々の謙虚で質素な生活を確実に破壊するのだ。1968年に書かれたこの詩で、オルソンは、ガソリンスタンドを拡張するために、歴史的価値のある館の取り壊しを決定した市当局を批判している。

グロスターはアメリカ建国の始まりの場所である。17世紀のはじめ、ドーチェスター・カンパニーの漁師たちは、グロスターに入植し、漁業を開始した。漁業はグロスターの主要な職業になった。

グロスターの漁業によって生活する共同体は、プリマスのピューリタンとは異なり、つつましく、自然な生活を営んだ。プリマスのピューリタンの精神構造は、商業主義と後に資本主義を受け入れるのに適していた。プリマスのピューリタンにとって、利潤追求は善であった。これに対して、グロスターの漁師たちは日々の必需品があれば満足できた。グロスターの人々は、困窮している人や生命の危機に陥っている人を助けようとしていた。

しかしながら、1950年に橋が架かり、高速道路ルート128が開通すると、グロスターは質素な生活の美を失い、資本主義国家アメリカの一部になっていった。我々は資本主義がもたらす壊滅的な打撃を見てきたわけであるが、移住に対する深い洞察を示す詩「移住の実際」(“Migration in Fact”)を見ておきたい。

・「移住の実際」

移住の実際（それはおそらく  
他のどのこととも変わらぬ歴史の常数。 移住は

動植物や人間が自分に適した  
——神々だってそうだ——好ましい

環境を追い求めること。だから、常に新しい中心へ向かう。懇願されたら  
おれは、アサ神族＝ヴァニル神族の双極子を加えることにしよう、それを

機動力アニメスに加えるのだ（そこに加わる怒りが  
魂——すなわち、精神や意志は常に

先立つ物に対抗し、これを侵すことに成功する、これが  
この世界の バラでありバラでありバラなのだ。

八月八日、月曜日、夜

“Migration in fact” (*The Maximus Poems* 565)

この詩は、移住の歴史に対する透徹した洞察を示している。「移住は自分に適した、より好ましい環境を追い求めること。だから、常に新しい中心へ向かう」と詩は言う。この提言に対して反対する者はいない。なぜなら、提言は我々の常識と合致しているからだ。

「動植物、人間、そして神々までもが、より住みやすい場所へ移住する」という詩句も同様に受け入れることができる。しかしながら、8-9行目の詩句「精神や意志は常に／先立つ物に対抗し、これを侵すことに成功する」によって、われわれは、移住とは、「先立つ物」に対抗し、これを侵すことであるという実相を知るのである。ならば、この詩は帝国主義の時代にはとされたような、世界的な植民地化を肯定しているのであろうか。

答は否である。「移住」は西へ向かう動き（西漸運動）の一局面であるからだ。すなわち、イギリスからマサチューセッツへ、次いでヴァージニアへ、その後にミシシッピとテキサスへ、次にアリゾナとカリフォルニアへと居住地を開拓していったのがアメリカの歴史である。それは西へ向かう動きだった。

本論 61-62 頁に挙げた「手紙 23」の第二パセッジを再度ご覧いただきたい。そこに出てくるマークという名前は、ハーヴァード大学の歴史学者フレデリック・マーク（Frederick Merk）を指す。フレデリック・マークは『西へ向かう動きの歴史』（*The History of the Westward Movement*）の著者で、オルソンは彼の学生だった。詩中ではオルソンは、「フィッシャマンズ・フィールド」についてマークより良く知っているようにふるまっている。しかし、オルソンはフレデリック・マークから吸収した西へ向かう動きという考え方を忘れたことはなかった。詩論にもその考えは現われている。次の詩をご覧いただきたい。

・マクシマスより、グロスターへ、手紙 27 [出さずにおいたもの]

わたしの語る数々の事実が  
生まれるのは、その発するところは

わたしが最早わたしではなく、しかも、わたしであるところ  
わたしを超えて

西へ向かうゆるやかな動き

“*Maximus, to Gloucester; Letter 27 [withheld]*” (*The Maximus Poems* 184)

オルソンは、西へ向かう動きを取った多くの人々の一人だと自分をとらえている。17 世紀の新世界は、西へ向かう動きに従って領土を拡大するとともに、産業を育成し、数世紀をへてアメリカ合衆国となる。ネイティヴアメリカ人は、白人の移住の犠牲になるばかりではなかった。彼らも西へ向かう動きに参加したのだった。

オルソンは常に自分がアメリカ史（the HISTORY of America）のどこにいるのかを知ろうとしている。オルソンは自分の叙事詩の中へ入っていき、マクシマスとして語る。グロスターの人々のために何をなすべきか、そしてアメリカ国民のために何をなすべきか、また文化が異なる国々の人々のために何をなすべきかを。オルソンの言葉は時として難解であるが、『マクシマス詩篇』が個人的な歴史の積み重ねによってアメリカの歴史（HISTORY of America）をわれわれに示そう

としていることは納得できる。次に、パウンドの『詩篇』を検討することにしよう。

## V. 『詩篇』の中の歴史

『詩篇』は比類ないモラルの美を描くパセッジに満ちている。モラルは主に統治者や政治的指導者、あるいは皇帝にとってのモラルである。以下、本論冒頭に掲げた表の叙事詩に含まれる歴史を見ていく。対象とするのは「詩篇 13」, 「詩篇 53」, 「詩篇 74」, 「詩篇 83」, および「詩篇 99」である。

### ・「詩篇 13」

そして孔子は言った「武王は適切な度合いによって統治した、  
彼の治世では、国は良く治まっていた、  
私でさえ思い出せる  
歴史家が自分の著述に空白を残しておいた時のことを、  
知らないことは書かなかったのだ、  
だが、そんな時代は去ろうとしている。」  
そして孔子は言った、「人格がなければ  
あの楽器を奏することはできない  
また頌歌に相応しい音楽を奏することもできない。  
あんずの花びらは  
東から西へ吹き散っていく、  
私は花びらが落ちないようにしようと骨折ってきたのだが。」

Canto XIII (*The Cantos* 60)

「詩篇 13」では、孔子の高い水準のモラルがあんずの花の美と一つになっている。孔子は、われわれに教える、人間は高い人格と正直な心を持たなければならない。仁者は常に事物の美が損なわれないように気を配るものだ。国を治めるには、まず統治者が自らを治めなければならない。

以下、『詩篇』におけるモラルの系列を見ていく。

「詩篇 53」を読む前に、テレル (Carroll F. Terrell) の *Companion to the Cantos of Ezra Pound* を見ておこう。成湯王と殷王朝についての基礎知識を得るためである。

Tching Tang (Ch'eng T'ang) who reigned 1766-1753 B. C. founded the Shang dynasty (1766-1122 B.C.). He was a model king who subordinated every passion and feeling to the good of the people. (Thing Tang: 成湯王, the Shang dynasty: 殷王朝)

### ・「詩篇 53」 (*Cantos LII-LXXI*)

成湯王は山で祈り  
新たにせよと自分の  
浴槽に刻んだ

新 hsin<sup>1</sup>  
日 jih<sup>4</sup>  
日 jih<sup>4</sup>

日々新たにせよと                      新 hsin<sup>1</sup>  
下生えを刈り、  
丸太を積み上げ  
その心が育つようにした。  
成湯王が死んだのは 100 歳の時、  
治世の 13 年目であった。

Canto LIII (*The Cantos* 265)

「日々新たにせよ」は成湯王のモットーであった。パウンドは、われわれに尊敬に値する王が何をなしたのかを見せてくれる。

・「詩篇 74」(*The Pisan Cantos*)

農民の曲がった肩にひそむ夢の途方もない悲劇  
マニよ！マニはなめし皮にされ、剥製にされた  
ベンとクララもミラノで同じ目にあった。  
ミラノで踵から吊るされた  
蛆虫どもが死んだ雄牛をむさほるためだ。  
ディゴノスは「二度生まれた」だが、二度はりつけにされた者を  
歴史の中に見つけられるか

(*The Cantos* 445)

パウンドは、ムッソリーニの熱烈な讃美者だったので、ムッソリーニと愛人クララが、パルチザンの一団に捉えられ、銃殺されたことを知ると、衝撃を受けた。二人の死体は、ミラノまで運ばれ、「切り刻まれた肉のように、踵から吊るされ、群衆により辱めを受けた」(Wilhelm 212)。

ムッソリーニを失ったパウンドは、OY TIS (無人) になる。『ピサ詩篇』は、死に等しい絶望から自らが回復するパウンド自身の記録である。

・「詩篇 83」(*The Pisan Cantos*)

「戦いなさんな」とジョヴァンナが言った  
意味は、前にも言ったが、「あまり仕事に精を出すな」である  
やめろ      勿  
            助  
            長

(*The Cantos* 551-52)

これは『ピサ詩篇』の中でも最も幸せな瞬間の一つである。「戦いなさんな」(“Non combaattere”)は、イタリア語のフレーズで、「戦うな」(“Don't fight”)の意味である。ヴェニスのある家の家政婦ジョヴァンナが、このフレーズを「あまり仕事に精を出すな」の意味で用

いたのである (Terrell II. 461)。ジョヴァンナのイタリア語を中国語に翻訳するなら、上記引用にあるような中国語になるだろう。「勿助長：成長を助けること勿れ」“Do not help to grow.” これは『孟子』巻第三 公孫丑章句上に書かれているフレーズである。

また（早く育て上げたいものだ）あの宋人のようにあせって助長してもいけない。むかし宋の国のある百姓が、苗の成長がおくれているのを心配して、なんとか早めたいものと一本一本引っぱってやった。グツタリ疲れきって家にかえるなり、『ああ、今日は疲れたわい。苗をみんな引きのばしてやったものだから』と家のものに話したので、息子が（変に思って）いそいで田圃へかけつけて見たら、苗はすっかり枯れていたとのことだ。世間にはこうした馬鹿げたことをするものが少なくはない。（『孟子』（上）124-25）

ジョヴァンナと孟子は同意見である。育つに任せるがよい、という意見だ。20世紀イタリアの家政婦と古代中国の哲学者の心は、等しく、人間と事物に対する愛にあふれている。

・「詩篇 99」(*Thrones de los Cantares*)

季節に芽が出て  
自分の蚕のための木々があるのに、  
大きな男が耕作をせず、  
一人の女が編み物をしないなら、  
物不足が起こりうる、  
古より帝は耕作を好み  
皇后は敬意をもって木々の世話をする  
仕事の暑さをいとわないのだ  
兆 きざし  
計画は自然の中に  
根付いている  
大地から出てくる、時は (ch'ang<sup>2</sup> [示す]) 敬われ  
それらの力が一つになって  
(chu[集まる] 四つが集まる  
その根元には必然がある  
一人の男の単なる力ではない

(*The Cantos* 729)

パウンドは、皇帝にとって必要な徳を描いている。帝が耕作し、皇后が蚕のために木々の世話をしている様子を我々は見るが、他方では、「大きな男が耕作もせず／一人の女は編み物をしない」。帝と皇后は、生産物の不足によって民が苦しまないように、農業に従事しているのだ。帝と皇后は、自然の「計画」に従っている。

パウンドの歴史は、支配者の歴史である。『詩篇』には、貴族、傭兵隊長、戦争の指揮官、王や天皇、偉大な哲学者、そして多種多様な芸術家たちが登場する。『詩篇』から引用した五つのパセッジでは、様々な種類の徳が天国的美の中に溶解している。パウンドの叙事詩では、

歴史的場面は、しばしば歴史を超えた美の中に溶け込んでいく。

上記五つの引用箇所では賛美される徳は、人間を含む動植物が成長するよう促すのである。パウンドの眼は、地上の木々を見ているばかりでなく、「自然の中の計画」も見通している。そろそろ結論に向かう時だ。本論 56 頁で、オルソンはパウンドの欠点を述べていた。要約すると「パウンドが生きた人生は文学的人生のみであり、言葉の煌めきは素晴らしいが、根が干からびてしまう」であった。

しかし、私はオルソンの考えに賛成できない。なぜなら、一つ一つの詩篇で生まれる活力にあふれる大気は、読者の「根を干からびさせは」しないからである。むしろ、『詩篇』はわれわれに成長する力を与えてくれるのだ。パウンドの叙事詩『詩篇』とオルソンの叙事詩『マクシマス詩篇』について、暫定的結びを示しておきたい。

## VI. 暫定的結び

二人の叙事詩人を比べることによって、われわれはパウンドが「成長」の詩人であり、オルソンは「移住」の詩人であることを知った。この結びの直後に付録として、「移住の実際」のバラ型手書き版を載せておく。左へ左へと渦を巻くように進んで行き、最終的にはガートルード・スタインの「バラはバラでバラでバラである」という命題に行きつく絵のような詩を深々と味わっていただければ幸いである。

\*本稿は、2019 年 10 月 19 日(土)長崎市の活水女子大学において開催された日本エズラ・パウンド協会第 41 回大会で、“Ezra Pound and Charles Olson: How does the Epic contain History?”というタイトルのもとに行った研究発表原稿を日本語に直し、加筆修正を施したものである。

## 引用文献

- Butterick, George F. *A Guide to The Maximus Poems of Charles Olson*. U of California P, 1978
- Merk, Frederick. *History of the Westward Movement*. Alfred Knopf, 1978.
- Olson, Charles. "Projective Verse." *Human Universe and Other Essays*. Ed. Donald Allen. Grove P, 1967. pp. 51-61.
- . *The Maximus Poems*. Ed. George F. Butterick. U of California P, 1983.
- Pound, Ezra. *The Cantos of Ezra Pound*. New Directions. 1970. Fourteenth Printing, 1998.
- . "How to Read." *Literary Essays of Ezra Pound*. Edited with an Introduction by T. S. Eliot. New Directions, 1935. pp.15-40.
- Seelye, Catherine ed. *Charles Olson and Ezra Pound: An Encounter at St. Elizabeths*. Grossman Publishers, 1975.
- Stein, Gertrude. *The World is Round* (1939). *The Major Works of Gertrude Stein* vol. 13 Reprinted by Hon-no-tomo-sha, 1993. p. 50.
- . "Sacred Emily." *Geography and Plays* (1922). *The Major Works of Gertrude Stein* vol. 5. Reprinted by Hon-no-tomo-sha, 1993. p. 187.
- Terrell, Carroll F. *A Companion to the Cantos of Ezra Pound*. U of California P, Vol I 1980, Vol. II.1984.
- Wilhelm, J. J. *Ezra Pound: The Tragic Years 1925-1972*. The Pennsylvania State U.P, 1994.
- 新倉俊一訳『エズラ・パウンド詩集』角川書店、1976 年
- チャールズ・オルソン著『マクシマス詩篇』ジョージ・F・バタリック編 平野順雄訳 南雲堂、2012 年
- 『孟子』(上) 小林勝人訳注、岩波文庫、1968 年



付録 2

バラ型手書き文日本語訳



